

スイーツ女子?! のこぼれ話

〇〇〇〇〇〇／学生担当 松本朋美

子供のころ(ずいぶん前です)から3度の飯より甘いもの(お菓子やくだもの)が好きな私。ドタバタの子育てもひと段落、気持ちは20代前半だけど、体は正直で白髪もちらり(；)な毎日。休日は家でのにびり過ごすことが多いのですが、先日「美味しいブドウが食べたい」という欲求に突き動かされ1時間ほどかけて「道の駅都農」へ。お目当てのブドウはお値段もそれなりでたくさんは購入できなかったのですが、ふとお店の外に「季節限定のブドウのソフトクリーム」の文字が。「今しか食べれん!」とあわてて購入、残暑厳しい日差しから大切に守るべく、いそいそ食べ

たら、案の定、頭がキーンとして(笑)この350円のソフトクリームのおかげでほんとに元気になり、美味しいブドウを生産してくださったブドウ農家さんやソフトクリームを提供してくれた畜産(牛)家さんに感謝の気持ちでいっぱいでした。旬の野菜や果物は安くておいしくて、宮崎で暮らせて幸せだなと思ったりして。最近の私のおすすめはバナナ(皮をむいて一口大)とブドウ(そのまま)の冷凍です。気のせいかもしれませんが、めちゃくちゃ甘味が増して美味しいです(^^)少し溶けたぐらいのシャリッと感も良くて夏は市販のアイスより断然おいしく私はこれで夏バテを乗りきります。

昨年2月から、医系学生向けの食材支援を行っています。「食べること」は人が生きる糧であるとともに心を豊かにしてくれるものと信じています。すべての人が安心して毎日食して笑顔になれる社会であってほしいと思います。



「星の王子さま」



(サンテグジュペリ著)

私の好きな

本

宮崎生協病院
内科医師 永友 英之

私は「星の王子さま」が大好きです。まず、タイトルがいいですね。フランス人作家のサンテグジュペリによって書かれた「Le Petit Prince」の訳ですが、そのまま訳せば「小さな王子」。これを最初に「星の王子さま」と訳した人の文才にはうなるよりありません。あらずじとしては、パイロットである「わたし」と小さな星から来た「王子さま」との二人の物語です。王子さまは、「わたし」と出会う前に、自分の星で世話ししていたバラのあまりのわがままについていけず星巡りの旅に出て、地球にたどり着きます。地球で王子様はキツネや「わたし」と一緒に過ごすことで、星に置いてきたバラが自分にとってどれだけ大切なものだったかに気付く、自分の星に戻っていきます。王子様と過ごした「わたし」も大切なことを知っていく、というものです。話としては「竹取物語」など古今東西よくある、出会うから別れるまでの物語です。またあるこの種の話の中で、今残っているものはそれぞれが名作ですが、この作品を名作たらしめているものは何と言っても美しさでしょう。

「王子さま」が星巡りの旅で出会う人々(ダメ人間として書かれている人も含め)とのエピソード、地球で「王子さま」とキツネが親しくなっていく経過、「王子さま」と「わたし」と別れの場面などの一つ一つが美しいスナックショットのようで、全体が一冊のアルバムのようになっています。そして、その中に珠玉の言葉が散りばめられています。「かんじんなことはね、目に見えないんだよ」「きみがバラのために費やした時間の分だけ、バラはきみにとって大事なんだ」「星があんなに美しいのも、目に見えない花がひとつあるからなんだよ」これらの言葉は、それだけで深いのですが、本の中で読むとさらに深く心に残ります。私がこの本を読みたくなるのは、大切な仲間や友人と別れの時などです。もちろん別れの悲しさを軽くしてくれるわけではなく(そんなに簡単なものではありません)が、思い出を美しいものにしてくれるような気がする、そんな本です。未読の方はぜひどうぞ。なお、いろいろな人の訳が出ていますが、池澤夏樹さんの訳が私にはとても合います(個人の感想です)。解説本も出ているので、そこらもかなり参考になります。つまり人は、最初でつまずくと思いますが、そこを乗り越えるか、読み飛ばしていくと後は急に読みやすくなります。そして後から戻ると、「ああ、そういうことだったのか」と気付くと思います(実は私がそうでした)。参考になればいいのですが…。

あとどうでもいい話ですが、原題の発音を日本語でそれらしく書くと「プチ プリンス」となります。「プチン プリン」に似ていませんか? どこにも書かれてかれていませんが、ギリ○(別に隠す必要はないのですが)は絶対「星の王子さま」を意識して「プチン プリン」と名付けたんだと私は思います。『プチンプリンがおいしいのは、目に見えない「星の王子さま(プチ プリンス)」がいるからだよ』

などと考えながら、秋の夜長に食べてみてはどうでしょうか?

私のススめ

本/DVD/音楽etc紹介

「〇〇〇〇〇〇〇〇」

〇〇〇〇〇〇／総務部長
白石 敏夫

私は、「熊」(熊害 ゆうがい)や「マタギ」の小説が大好きです。

「熊」が出てくる主な小説として熊嵐、シャトゥーンヒグマの森、ウエンカムイの爪などがありますが、私のススめは熊谷 達也さんのマタギ3部作の2番目にあたる「邂逅の森」です。

一章から十章までで構成されており、そのタイトルがそのままあらすじとなっています。第一章「寒マタギ」第二章「穴グマ猟」第三章「春山猟」第四章「友子同盟」第五章「渡り鉦夫」第六章「大雪崩」第七章「余所者」第八章「頭領」第九章「帰郷」第十章「山の神」



この小説の概要を簡潔に述べると「秋田の極貧作農の次男に生まれたマタギである富治を通じ、縦糸としてマタギがあり、横糸として大正から昭和初期の厳しい寒村地域や当時の風土、過酷な炭鉦労働、相反する生き方をしてきた二人の女性の物語が織り込まれた超大作。」です。

冒頭のアオシシ(ニホンカモシカ)猟から、躍動感と疾走感が交錯する狩猟描写に圧倒されます。当時の鉦夫の劣悪な労働環境と塵肺の恐ろしさも紹介されている「第五章 渡り鉦夫」から物語が俄然面白くなります。

そして最後の「山の神」。ここで一生に一度しか巡り合わないであろう山の主、ミナグロと富治の壮絶な闘いが!ここはとにかく「震えます!」

～「俺はおめえの仲間をさんざん殺めてきたからの。かまわねえが俺を喰え!俺を喰って力ばつけて生きながらえろ!」是非、ご一読を。